

## 拙著『佐多稲子研究（戦後篇）』に於ける、

### 「佐多稲子日記」記述についての事実誤認その他

北川 秋雄

#### 一、「溪流」に関する「佐多稲子日記」記述についての事実誤認

二〇一八年五月に、「佐多稲子日記」の一九五三年から五五年、五七年から六六年の翻刻を掲載した『くれない——佐多稲子研究——第一二号』が刊行された。刊行時までは佐多稲子研究会の会員であった私も、一九六三年から六六年までの日記及び、六六年のソ連欧州旅行日記の翻刻・注・解題作業に従事した。作業の開始に当たっては本来なら、対象となる期間の手帳の全文を通読の上、担当者間で作業の方針・表記形式・凡例・注記・解題について協議、確認を行うのが通例であろう。しかしながら、着手の話は数年前からあったものの、会員全員参加の意向とならず、各自の分担箇所のみを本文コピーが、今回従事した四名の手元に届いて、その箇所の作業に終始した。結果として、私が今回の翻刻の全文に接したのは、手許に届いた『くれない一二号』誌上であった。そこで初めて、拙著『佐多稲子研究（戦後篇）』における自らの事実誤認に気付いた。

日記翻刻を通読後、直ちに浮かんしたのは、事実誤認の拙著を刊行した私の、読者に対する責任であった。さらに出版に際して厚情を賜った各位や出版社にも謝罪しなければならない。本来なら、即刻、改訂版を出すべき失態である。ともかく、拙著に関して懇切かつ丁寧極まる書評の執筆で、貴重な時間を割いて頂いた諸氏に、二〇一八年六月付の私信で事実報告とお詫びを申し上げた。

直ちに二人の方から返信を頂き、なかでも伊藤佐枝氏からは、『論潮通信 第一一号』紙上に、「北川秋雄著『佐多

稲子研究(戦後篇)のこと」と題して、拙著誤記の事実を公表し、訂正を周知して頂くという望外の御厚意を賜ることになった。伊藤氏とは、ここ数年来、相互に自著論文の献呈と、それに関する私信の遣り取りに終始する程度の間柄である。にもかかわらず、面識もない私のために二〇一七年、貴重な研究同人誌の紙幅を割いて、書評論文「論潮ブクレヴェー 北川秋雄著『佐多稲子研究(戦後篇)』」を書いて頂いた。今回、伊藤氏は、私が近年、心身の不調で学会や研究会を退会し、発表の場を失っているのを感じて、急速、救いの手を差し伸べて下さったのである。失態に気付いた当初、発表の場として唯一残っていた勤務先の紀要のことは、全く思い浮かばなかった。投稿は学術論文のみとする「執筆要領」があったからである。

私は一九九三年一〇月に『佐多稲子研究』、二〇一六年三月に『佐多稲子研究(戦後篇)』を上梓する機会を得た。拙著に関して、佐多の戦争責任を追及するものであるとか、共產主義者のあるべき姿を求める立場からの告発であるとか、さらに佐多の偶像破壊を目論むものであるとさえる。他人評がある。私としては、プロレタリア文学期のナップ運動鼓吹、戦時下における戦争協力宣揚、敗戦直後のGHQ讃美、日本共産党批判という、〈屈折〉〈ゆらぎ〉どころではない佐多文学の度重なる反転の事実をもとに、佐多の作家としての対読者責任を論じて来たつもりである。自著の誤認が判明したからには、自らの言葉で対読者責任を明らかにしなければならぬと観念し、論文の体裁を採って、ここに失態の公表、訂正そして謝罪を思い立った。幸いにも今春、『戦後篇』の出版社である大阪教育図書から当初の契約に基づき、在庫整理のために半額で処分する旨、了解を求める文書が届き、すでに応諾していた。さらに今回、一〇月以降の発送時には正誤表を附すことをお願いし、快諾を得た。この勤務先の紀要も一昨年から学術機関リポジトリの設置によって、PDFで閲覧可能となっている。

さて、『戦後篇』の第三章「『溪流』私注——三つの家と背後の闇」の後注一九、第二四章に関する記述について、誤記であることが判明したので、経過の報告と訂正をする。「溪流」第二四章の本文〈安川友江はあくる年の正月を、東北のある温泉宿で過ごしていた〉〈近くの村からきた二十歳の青年が、牛乳一本分の塩酸をのんだ〉に照応する事実の有無について、『戦後篇』二〇八頁下段から二〇九頁上段に掛けて、以下の如く記している。

「あとき 時と人と私のこと(9) 実在した人への追憶」(『佐多稲子全集 第一〇巻』講談社 一九七八年九月)に、短篇小説「山の湯のたより」は「機械のなかの青春」を書くために数日滞在した岩手県志度平の宿で

遭遇した実事件に基いたとあるが、照応する事実とは未確認。日本近代文学館蔵佐多稲子文庫の日記『文芸手帳 一九五五年版』の一九五四年二月三十一日の項に〈鳴子温泉に越年 厚木さんと二人静かなり〉、一九五五年一月二日の項に〈十時鳴子出発 3時前小さな電車で志度平へ〉、一月六日の項に〈夜田舎芝居を五〇円三〇円の割引でみる 股旅もの 旅芸人の生活想像す 自炊で二物ひとつの部落のようなり〉、一月九日の項に〈寝たりずぶらぶらす、田舎芝居今日はどこへ行くのやらというおもしろい〉、一月十七日に〈8時起床すぐ帰る 雪の中電車おくれで汽車に間に合わずとのことでハイヤーでゆく〉とある。しかし自殺のことは出て来ない。

右記の末文へしかし自殺のことは出て来ない。が、誤記である。『くれない一二号』掲載の「佐多稲子日記」一九五五年一月一二日の項に〈夜階下で異様な男の声何か危険を感じ 其後のも様で異常な酔っぱらひかと寝につく〉、一二日の項に〈昨夜の階下の声自殺なりとのこと えんさんをのむ苦しさでふとんどびりびりとのこと 二十才の青年家庭の事情おもしろくなかったと受持の女中さん自分の番だったと話す 闇の声にどうしても灯がつけられなかったと 病院へ行ったのち死亡とのこと 旅館のおもしろさは人の中にゐて自分はずらはされぬという質にあり 今夜ものど自慢長もち歌さんさしぐれ上手な男の人あり 少女も歌ふ 三枚め上手な司会 ローカでうたふ〉とある。この太字部分を『戦後篇』で記述すべきであった。『戦後篇』第三章「『溪流』私注——三つの家と背後の闇」の初出は、二〇一二年三月発行の勤務先の紀要に発表したもので、その際の後注18の第二四章についての記述は以下の通りである。

厚木たかと一九五四年暮から五五年正月に鳴子温泉・志度平逗留、一九五五年一月志度平温泉自殺「時と人と私のこと(9) 実在した人への追憶」(『佐多稲子全集 第一〇巻』講談社 一九七八年九月)に、短篇小説「山の湯のたより」は「機械のなかの青春」を書くために数日滞在した岩手県志度平の宿で遭遇した実事件に基いたとあるが、照応する事実とは未確認。

『戦後篇』の後注の〈日本近代文学館蔵佐多稲子文庫の日記〉以下の部分は、『戦後篇』刊行作業中の加筆である。日本近代文学館に赴き、手帳の実物を閲覧した上での記述であり、ひとえに私の不注意の見落としに因るものである。今夏、岩手県立図書館所蔵の一九五五年一月分の『岩手日報』・『朝日新聞岩手版』・『毎日新聞岩手版』・『読売新聞岩手版』・『岩手新報』・『日刊岩手』・『花巻新報』・『東山新報』を確認する機会を得た。しかしながら、志度平温泉

の青年の服毒自殺という当該事件に関する記事は見出せなかった。佐多日記には記述があるが、事実の有無は尚未確認である。

加えて、『戦後篇』は、『溪流』第十七章の〈妙義山中で山村工作隊の青年、凍死体で発見、という記事〉について、〈「燃ゆる限り」(『婦人画報』一九五三年八月〜五四年八月)にも出て来るが、照応する事実は未確認。〉<sup>12</sup>としている。『くれない一二号』の一九五三年一月二六日の項には〈妙義に工作隊凍死した青年ありと聞いてはつとす。〉<sup>13</sup>の記述がある、これについても「燃ゆる限り」(『婦人画報』一九五三年八月〜五四年八月)にも出て来る。さらに佐多稲子日記の一九五三年一月二六日の項には〈妙義に工作隊凍死した青年ありと聞いてはつとす。〉という記述あるが、照応する事実は未確認。とすべきであった。

## 二 『くれない一二号』掲載の佐多稲子日記の注記について

前節で触れたが、今回の翻刻作業は数年間の店晒し状態、しかも佐多稲子研究会の四名のみの作業参加となった。編集方針、様式、凡例、注記、解題については、個々の担当者が作業中に気付いた疑問点について、その都度メールの送り取りで凌ごうとしたため、作業途中で方針が変転し、早々に着手していた私は一からやり直すという無駄な体力・気力の消耗も強いられた。注記についても、担当箇所相互の重複は避けるという原則以外はなかった。作業の準備に関して、私も担当者の一員として責めを免れない。その点で、担当外の部分であるが、以下の注記は必要であったと思うので、覚書としたい。

一九五八年五月一日の項(達枝来。栄さんより電話で新日本文学会の高杉一郎(\*2)の記事のこと。畔柳さん佐藤夫人とつづけて電。古在さん(\*3)のと同じことで心配してくれる。の箇所)で、〈高杉一郎〉と〈古在さん〉に注番号\*が振られ、以下のように後注が記されている。

- (2) 小説家、翻訳家。静岡大教授を経て和光大学教授。著書にシベリア抑留体験をまとめた『極光のかけに』等
- (3) 古在由重。哲学者、元名古屋大学教授。戦後、原水協の分裂に伴い共産党から除名処分を受けた。母は作家の清水紫琴。<sup>15</sup>

しかしながら、日記本文には一四日に続いて、一五日の項に〈畔柳さん電〉、一六日の項に〈芝木さん栄さんより電、畔柳さんのことなり。〉、一七日の項に〈朝栄さん横田さん電、畔柳さんのことなり。畔柳さん脱会と電。おもいとまる。〉と立て続けに、畔柳二美本人や周囲から彼女に関する電話が佐多に掛かっている。さらに〈脱会〉騒ぎまで出ていることが記されている。<sup>16</sup>

明らかに、畔柳絡みの騒動が起きているのだが、現行の高杉一郎と古在由重の簡易な注では何も分からない。ここではやはり、〈新日本文学会の高杉一郎の記事のこと〉に注を施すべきである。一九五八年六月号の『新日本文学』には、高杉一郎「サボタージュについて」という次のような一文があり、以下に要約する。

一九五六年の婦人民主クラブの創立十周年に当たり、『婦人民主新聞』の購読者数を拡大するため、クラブ本部から地方の各支部に対して、巡回講演会開催の要請がなされた。静岡支部のクラブ員は僅か一二名、その大半は静岡大学の教員夫人であったが、一時は静岡市だけで購読者を千名もあつめていた黄金時代の復活を期して活動を開始した。本部との交渉の結果、講師として、佐多と畔柳の二人が派遣されてくることになった。〈講師が決定すると、クラブ員たちは三十円の入場券をつくつて、市内を駆けずりまわり、これを売りさばいた。〉〈クラブ員やその協力者たちの奔走の結果、予想以上のたくさんのお客さんが売れた。〉

ところが、本部が知らせてきた講演会前日の到着時刻に合わせて、クラブ員が静岡駅に迎えに行ったところ、予定の列車に二人の姿はなく、〈みんなが蒼白になった顔を寄せあつて相談しているところへ、これも蒼白な顔をしたもうひとりのクラブ員が電報を片手にして駆けつけてきた。電報は二人の講師からで、「フタリトモビ ヨウキカエレヌ」という電報だった。〉講演を明日に控えて支部員達は、電報と電話で本部と再交渉、クラブ委員長の榎田ふきが来ることになった。〈あくる日、教育会館の二階をゆるがすほどにたくさん集った聴衆たちは、看板に偽りのあつたことに不満であつた。主催者の婦人民主クラブ静岡支部は、聴衆をなだめるために、講演会のあとで座談会を「おまけ」としてひらいた。それでもなお、聴衆のあいだに鬱積した不満を完全に拭いさることはできなかった。〉

講演会後には〈クラブに協力して入場券を大量的に売りさばいてくれたひとたちに、詫び状を刷つて送りとどける仕事が残っていた。その仕事もようやくおわつたとき、クラブ員たちは文字通り精もつきはてて、ヘタヘタと坐りこんでしまった形だった。購読者を大量獲得しようなどという意気込みは、もうとつくとどこかへ消えさつていた。〉

しかし、この出来事には後日譚があり、〈それが静岡の婦人たちのあいだでいつまでも忘れることのできない侮辱として、はげしい公憤をまきおこした〉。講演会の六ヶ月後の十一月、鉄道弘済会広報部の『あすなろ』雑誌に掲載された、畔柳二美「旅の思い出」という以下の如き文章が、静岡支部の人の目に留まったからである。

今年の春、私は生れてはじめて九州へ行った。講演旅行であつた。佐多稲子さんと一緒であつた。最初は、大阪、神戸、岡山、熊本、静岡の順に講演の予定であつたのだが、関門トンネルをくぐつたとたんに、私がおかしな病氣にかかつてしまった。つまり、「九州で少し遊びたい」という慾望の名の病氣なのだ。なにしろ、生れてはじめての九州訪問なのだから、無理もないことというので、同行の佐多稲子さんも、ついでに病氣になつてくれることになつた。そこで、熊本で講演がおわるや、二人は早速、静岡の講演会場に電報を打つてもらつた。「フリットモビ ヨウキカエレヌ」（略）九州らしい道々の風景は申すにおよばず、阿蘇の雄大なる眺めにただただ感激、私は心から病氣になつてよかつたと考えた。

〈この随筆はつきつぎにつたえられて、静岡市の若い婦人たちを憤激させた。そしてその憤激がたまればたかまるほど、婦人民主クラブ静岡支部のひとたちは責任感と恥辱感で肩をすぼめ、首をうなだれなければならなかつた。彼女たちが、この短い随筆から蒙つた精神的な打撃と物質的な被害が、誇張なしに言つて、なみたいていのものではなかつたことをよく知つてゐる。私自身は直接の被害者ではなく、ただの傍観者でしかなかつた。しかし、その私が、このことを一度は書いておかなければいけないと思うようになったのだ。隣人の社会的サポーター・ジュを注意してやることは、けつして大人氣のないことではないということに、その出来事から二年ちかくの月日が経過したあとで、はじめて思ひついたので。〉

この高杉の文章に拠つて初めて、日記に畔柳の名が頻出している理由が分かるであろう。〈脱会〉とは新日本文学会もしくは、婦人民主クラブからの脱会ではないかという推測もできる。畔柳は〈今年の春〉と記しているが、一九五六年の佐多稲子日記では、四月二十八日大阪で畔柳と出会い、二十九日に神戸、三〇日に川西市、豊中市、五月一日に岡山の柵原鉾山、二日に岡山で畔柳と落合。三、四、五日に熊本、島原、六日に雲仙、長崎、八日に帰京とある。しかし、熊本の次に予定されていた静岡講演の、仮病キャンセルについて言及はない。

高杉が事件の二年後に事実を公表した真意のほどは分からない。シベリア抑留体験者である高杉の『往きて還りし

兵の記憶』には、一九五〇年当時の日本にあつては、いち早くスターリン体制に疑義を呈した自著『極北のかげに』について、宮本顕治・中野重治・佐多稲子が同一步調を取つて批判したことが記されている。さらに収容所で捕虜仲間と佐多の〈変節〉を話題にした挿話を掲載したことに対して、佐多から手紙で抗議があつたことも記されている。<sup>18</sup>高杉には、佐多に対して含むものがあつたかもしれない。それを差し引いても、佐多日記に静岡訪問の記述がないこと、佐多や畔柳の直後の反論がなかつたということから、サポーター・ジュは事実であつたと見てよい。一九五九年三月号の『新日本文学通信』<sup>19</sup>には、〈文学集会の予告〉として評論の部に、この高杉の文章名が挙げられている。掲載時の会員の関心は高く、事務局も注目しており、単なるゴシップ記事として読み捨てられることはなかつたのである。

注釈担当者に新日本文学会の記事を探索する気があるなら、さほどの手間は掛からない。〈一九五六年五月の婦人民主クラブ静岡支部開催の講演会前日に、佐多と畔柳が仮病による講演のキャンセルを行ったこと。詳しくは高杉一郎「サポーター・ジュ」(『新日本文学』一九五八年六月)を参照のこと〉と注記すれば足りることである。

次に、一九六一年二月二日の項の、〈国分さんとかえる武井さんの中のさんの話辛いことなり〉<sup>20</sup>には注記がない。武井と中野の〈話辛いこと〉とは何であるか。一九五九年一月号の『新日本文学』には、中野重治の「自分に即して」という短文が掲載されている。その中で以下のような一節がある。

「自分に即して」えば、たとえば私が全集を出しかけてゐる。私は武井昭夫と近藤宏子との批評をよんだ。近藤は、全集の形で出てなかなか便利だが、全集は死んでからに、といった覇氣がもう一つほしかつたという意味功なりて万骨枯るといつたが……というようなことを書いた。それぞれ一理はあるかも知れないが、総則第二にいう「建設的な批評研究」というのは少しちがつてくる。センチメンタリズムがそこに、日本文学全体にあるだろう。一将功なりて万骨枯るではない。日本の進歩的文学運動のなかに私の書いたものの全部をおいて、そのプラスとマイナスとを具体的につまみ出すことが武井に課せられている。多くのマイナスとともに、そこにあるプラスをつかみ出すことこそが批評家の任務になる。(略)ただ私は、ある作家たちとはちがつて、批評家の影響を受ける方の一人だから、批評家が何をいおうと、関知するところでないといつたタイプの人とは意見がいくらかちがうだろうと思う。

中野はプロレタリア文学運動渦中、志半ばで潰えた同志を〈万骨〉に、功成りおおせた〈一将〉を自分に擬えた武井に對し、新日本文学会員の批評家たるべき姿を先輩として教諭する姿勢を取っている。しかしながら、右記の引用末文をみると、武井の発言は相当に堪えているように見える。

ところで、『新日本文学』一九五九年四月号には「お願い」と題して、へいよいよ中野重治全集の第一巻を、三月九日に発売するところまでできました。完璧なものとするために、左記の新聞、雑誌を探しております。お持ちの方はお知らせ下さい。（略）なお、このほかに入手しにくいと思われる中野重治執筆資料をお持ちの方はお知らせ下さい。加えて、四月号には半頁分の中野の顔写真入り広告、五月号の裏表紙は中野の顔写真を附した「中野重治全集」の全面広告が掲載されている。佐多と同様に中野も終生、新日本文学会に金銭上の支援を続けて来たことは知られている。この時の広告料も会に寄与するものであったろう。しかし、『新日本文学』誌の扱いは破格であり、これも武井の言を誘ったのではないだろうか。『新日本文学』一九六一年一月号と二月号は、新日本文学会創立一五周年を記念して、座談会「文学運動の課題と展望」を掲載している。中野と武井・安部公房の意見の齟齬が見て取れる。そして七年余後、この〈一将功なりて〉の話題は、一九六七年二月号の『新日本文学』誌上、花田清輝と武井昭夫の対談「芸術運動とは何か」において、再び持ち出されている。

花田（前略）最近幹部会などでディスカッションをしていると、みんな芸術家になっちゃってるような気がしてきたんだね。それだからそんな連中は運動なんかしなくてもいいんじゃないかって気もしたんだ、その時。それは芸術家といってもたいしたことではないと思うけれど。将棋で言ったら王様ではない。

武井 歩も成金になりますからね。（笑）

花田 歩がみんな成金になっちゃってるんだ。活動家は芸術家と対等であっていいと思う。

（中略）

花田 編集長、編集責任者というのは単なるアクティブとは称し難い。オルガナイザーの一面をもっているわけですね。当然。武井君は中野重治全集が出た時、「一将功成りて万骨枯る」と言ったそうですね。

武井 そう言った人の話を紹介したわけですよ。

花田 ぼくは一将は功成ってもいいと思うんだよ。万骨は枯れてもいいと思う。

武井 そうですか。

花田 つまり万骨というものになって枯れることを愛するものが活動家だと思ふのです。

武井 それは、枯れること自体が目的じゃない。（笑）それから、一将功成ることが目的でもない。

花田 もちろんそうだが、だからと言って一将功成ることは結構なことであって、それが万骨の目的の一つでもあるわけだ。

武井 だけど、一将の方がいい気になってたら困るわけです。（笑）

笑いに紛らせて話されるが、七年余の時日を経ても〈一将〉に擬える人物についての武井の物言いは辛辣である。発言当初は、多くの耳目を集めたということが分かる。『中野重治全集 全一九巻』は一九五九年三月から一九六三年九月に筑摩書房から刊行されている。目下のところ全集が〈出た時〉の武井自身の発言の出所が確定できないが、日記の〈辛い〉話とは、日米安保条約反対運動後の武井等の若い世代と中野との亀裂を窺わせる事象である。一言の注記もないのは解せない。

### 三 「夏の葉」前後のこと

前章で中野重治について言及した次いでに、佐多稲子「夏の葉」の後日譚に話を移すことにする。今夏偶々、大正デモクラシー研究者の松尾尊兌『中野重治訪問記』<sup>21</sup>を読んで、以下のことに考えが及んだ。「序 中野重治と私」によれば、松尾は日本史学者の北山茂夫の弟子で、北山と中野の長年に亘る親交の縁で、中野家に出入りを許される。一九五四年に中野に会ってから、六四年以降、中野の死去まで中野家に入りし、三四回の面談、二二回のメモを取り、松尾からは四一通の書簡を出し、中野から二七通の書簡を受け取ったと言う。一九七九年三月から文部省在外研究員としてロンドンに赴任中の八月、中野の訃報に接した。〈翌年三月帰国してまもなく、上京して、中野夫人、すなわち原泉さんにお悔やみを申し上げました。ご遺骨は、二階の書斎に、全集にはさまれて安置してありました。そのとき原さんから、私などよりはるかに近い関係の某氏についての不満を聞かされました。中野さんの死を種に原稿

料かせぎをしたと受取られたようです。』と述べている。<sup>22</sup>松尾のいう〈某氏〉とは誰なのか。

竹内栄美子は、最近これに類することを「中野重治を追悼する佐多稲子『夏の葉』の青春」において、以下のよう

に述べている。

実は、私は、原泉さんのお宅にうかがってさまざまなお話をうかがうなかで、原さんから「あなた、『夏の葉』を読みましたか。作家はこわいわねえ」と言われたことがあった。そのとき私は、その「こわい」という意味を、普通に何気ないようでも作家はよく観察して何でも書いてしまうことだろうか、と何となく受け取ったのだが、原さんがどういう意味で言われたのか、本当のところは分からない。自分が登場する場面での描き方が不本意だったのか。しかし、あれに書かれていることは嘘です、というようなことは、原さんは一言も言わなかった。また、佐多さんについてのゴシップめいたことや悪口なども原さんからは聞いたことがなかった。<sup>23</sup>

松尾は、一九八〇年三月に原から〈某氏〉についての不満を聞かされたことと述べている。ところで、竹内と原の語に出て来る「夏の葉」は、『新潮』に一九八二年一月から二月まで連載、その後同名の単行本として、一九八三年三月に新潮社から刊行されている。したがって、松尾が聞いた〈某氏〉についての原の〈不満〉は、「夏の葉」によるものではない。一方、竹内が原から言われた〈作家はこわい〉は、原の「夏の葉」読後感である。竹内は、この原の言葉について、その時は作家の観察力への畏敬という程度の通り一遍の解釈をしたが、真意は分からないとしながら、それに次いで〈不本意〉〈嘘〉〈ゴシップ〉〈悪口〉などというマイナスのニュアンスを含む語を、何故わざわざ自ら持ち出すのであろうか。

〈私などよりはるかに近い関係の某氏〉〈中野さんの死を種に原稿料かせぎをした〉という松尾の言を聞けば、中野の交友関係に通じている者なら、〈某氏〉が佐多であることは、容易に想像出来よう。実際、佐多は中野の死の後、立て続けにブレ「夏の葉」群ともいへき中野回顧のエッセイを各紙誌に発表している。竹内の先掲の文章は二〇〇八年四月脱稿、六月に発表されている。二〇一二年四月に平凡社から刊行された『中野重治書簡集』の「編者あとがき」で松下裕は、〈中野さん没後に、書簡を集収しようとして始めたのは、原泉さんだった。一九八〇年九月の原さんの、この仕事を始めるについての挨拶状が残っている。それは中野さんから手紙を受けとった可能性のある人びとに広くくばられた。原さんが、この仕事にどんなに力をそそいだかは、松尾尊兌さんの『中野重治訪問記』の

「別れ」の章に書かれている。<sup>24</sup>と述べている。竹内は、松下とともに『中野重治書簡集』の編者である。先掲の文章で、佐多に対する原の〈ゴシップめいたことや悪口〉を、わざわざ持ち出す竹内の念頭には、松尾の〈某氏〉の話が当然、置かれていたと思わざるを得ない。

竹内の言の如く、生前の原が佐多への不平を竹内の前では言わなかったであろう。しかし、竹内は、一九九四年に中央公論社から刊行の『中野重治敗戦前日記』の注も担当し、『中野重治と戦後文化運動——デモクラシーのため』<sup>25</sup>などの近著を持つ中野研究者である。その竹内が、松尾の言に接してほぼ二〇年後の今も、原の「作家はこわい」について、猶も〈何気ないようでも作家は……〉〈本当のところは分からない〉という次元で、済ましていることが分らない。さらに続けて〈佐多稲子の中野重治への思慕は、原さんを見失ってとか、原さんを出し抜こうとか、そんなことはあり得ない。むしろ、若いころからともに苦勞してきた仲だっただけに、中野重治への信頼とともに原さんへの信頼も厚かったであろう。〉〈公表する作品のなかに、気持ちのうへの齟齬を正直に書いても、受け止めてくれるという思いがあったのだろう。それは、原泉との友情によるものだ。〉と断定している。しかし、その根拠は示されず、長年の友情・信頼という「美しい物語」に終息させて、読者の思考停止を促す観すらある。

ブレ「夏の葉」群の中で、松尾の弔問時までに原が目にするものが出来たものは、「入院中の中野重治」<sup>26</sup>、「中野重治さんのこと」<sup>27</sup>、「半年前のこと」<sup>28</sup>、「病中に聞いた言葉」<sup>29</sup>、「驢馬」の頃<sup>30</sup>、「記録映画『徳ぶ・中野重治』」<sup>31</sup>である。これらは、一九八一年刊行の『年々の手応え』<sup>32</sup>、一九八五年刊行の『月の宴』<sup>33</sup>の単行本に収録時点では、それ相応の印税も入っただろうが、初出時点で〈原稿料稼ぎ〉と言われるほどの金額ではない。すでに指摘していることである<sup>34</sup>が、「夏の葉」に見る如き、原の苛立つ言動や、中野の佐多に残した最高の讃辞とも取れる言葉、自分が女性でなかったら中野との別の付き合い方があったのではないかと佐多の言及は見られない。さらに「中野重治さんのこと」には〈俳優の原泉さんは中野重治夫人だが、その原さんが中野さんと結婚する以前から知り合っていて、その後もおたがいは、近くに生活した。このつきあいがあるから、今、中野さんを喪って、私には身近な思いも深い。〉という佐多の、原についての言及さえある。にも関わらず、原は夫の死を出汁にして稿料稼ぎをしたと松尾に不平を洩らしたとされている。だとすれば、竹内の聞いた「夏の葉」読後の原の「作家はこわい」という言葉には、松尾が聞いた以上のマイナスのニュアンスが込められていたと考えるのが、通常の感覚であろう。

ブレ「夏の栞」六編の発表時期を見ると、八月一編、一〇月一編、十一月二編、十二月一編、一月一編と立て続けである。中でも「入院中の中野重治」は、中野の死の三日後である。庶民感覚で言えば、遺族や近親者は悲嘆に暮れる服喪の時である。にも関わらず、佐多はおそらく文章の発表や内容について、遺族の了解を得る暇も配慮もなく、堰を切ったように書いている。〈書く人〉であった中野と佐多の間には、自分には立ち入れない世界があったという積年の痛覚と苛立ちが、この時、原の心底から噴き出したのではないか。

澤地久枝は原の依頼を受けて、中野重治の家族宛て未発表書簡集『愛しき者へ』を編集している<sup>35</sup>。上巻の「昭和の青春の書」と題する「あとがき」では、次のように述べている。

晩年の中野は心臓を病んでいて、澤地が二十年來通院していたクリニックに夫妻で通って来た。その待合室で幾度か話をする機会を持ったことが縁で、〈手おくれの胆嚢癌が発見されてから亡くなるまで、入院生活の四十日間、なぜか私は見えないところでかかわりをもっていた〉。〈初七日にあたる日、原さんから思いがけない電話をいただいた〉。〈原さんの用件は、中野さんの生前、「お前さんのことをききがきする人間は俺だろうけれど、もしも」と言って、私の名前が出たこと、原さん自身は中野重治との生活や追憶をどこにも書いたり語ったりしない、ききとりの役目を引き受けてもらえるだろうかというのが大意であった〉。〈それから曲折があって、一九八一年の五月から、「別冊婦人公論」の編集部の中野重治さんに助けられながら、「ききがき」の仕事をはじめることになった。その六月のある日、二十八巻本全集の編集担当者が原さんを訪ねての帰りきわ、中野さんの郷里の某氏が、中野さんの家族あての手紙五十何通かをもっていることを告げた〉。〈この五十七通の「衝撃」が呼び水となり、七月末、世田谷区桜の中野家に保存されていた五百通をこえる未発表書簡について、原さんは全文公開の決心をされた〉。〈原泉ききがき〉はいつか「中野重治の手紙を読む仕事」へと変わり、私は当初には予想もしなかった書簡集の編集をひきうける形になっていた。<sup>37</sup>

澤地は生前に中野から直接に、原からは〈初七日〉に聞き書きを依頼されている。中野夫妻は、生前から私生活を含めた事実の公表を予定していたことが分る。「夏の栞」第二章には、中野の枕元に録音機を置くようにしたのは、原と病院に交替で詰めた石堂清倫・小田切秀雄・佐多ら周囲の者の覚悟にもとづく用意であったとある。<sup>38</sup>

澤地は、一九九八年一〇月に死去した佐多稲子の追悼号『新日本文学』誌上の「佐多さんの孤独」において、中野

と原と佐多の三者の関係について、〈佐多さんの中野重治に対する思い、中野さんの佐多さんへの思い。その双方を鋭く観察しぬいた原泉さんのきりきりの気持〉<sup>39</sup>と述べている。さらに、二〇〇四年の「佐多稲子生誕一〇〇年記念講演 試される」において、戦時中の佐多と中野夫妻が疎遠になった時期に言及している。そして、再び〈原さん自身は中野重治との生活や追憶をどこにも書いたり語ったりしない〉<sup>40</sup>と述べて、〈書く〉佐多との対照を際立たせている。<sup>41</sup>中野没後の原の、佐多に対する拘りの感情を慮った澤地の心情が窺える。松尾の耳にした原の不満は、中野没後に原との日常的な遣り取りの中で、自ずと佐多に伝わって、それが「夏の栞」執筆の動機の一つとなった可能性もあろう。

原は中野死去の一年一ヵ月後の一九八〇年九月、中野からの手紙やメモ書きの拝借依頼状を知友、心当たり先に出して、〈私の在世中にこれだけは果たしたい〉と訴えている。<sup>42</sup>原が中野の死後、時日を置かず中野書簡の収集に着手したのは、生前の中野の意向を受けてのことである。当然、宮本顕治夫婦の『十二年の手紙』も意識していただろう。しかし、〈書いたり語ったりしない〉原が、立て続けに『愛する者へ』『敗戦前日記』の刊行や『女優原泉——中野重治と共に生きて』<sup>43</sup>の取材協力を積極的に遂行した根底には、通り一遍の「美しい物語」に留まらぬ佐多への複雑な思いがあったと見るべきである。

#### 四、結びに代えて

拙著の過失報告と謝罪、ならびに望外の御温情に対する感謝表明に始まった拙文が、いつの間にか思わぬ方向に逸れてしまった。ところで、小谷野敦は『現代文学論争』において、以下の如く述べている。

九五年に、北川秋雄（一九五〇——、当時姫路獨協大学助教授、現在教授）は、『たけくらべ』私攷——美登利〈初店〉説への疑問を載せており、（略）のちに北川の『一葉という現象——明治と樋口一葉』（双文社出版、一九九八）に収められたのでそちらを見たが、佐多稲子のつまらない揚げ足とりをするのが主で、しかも北川はこれより先に『佐多稲子研究』を上梓している佐多の研究家であり、あとがきでは佐多の計報に接した旨記してある。どうも、自分の研究対象たる作家の揚げ足取りをするというのもおかしなものだし（略）変な論文であ

る。”

小谷野は『現代文学論争』の奥付の著者紹介に拠れば、東大大学院比較文化専攻博士課程修了の学術博士（超域文化科学）で、現在は文筆を生業とし、〈文芸批評、小説、演劇、歴史、男女論などフィールドは幅広く、独自の「男性論」を展開する人物である。小谷野は最近の国文学界の下世話な話にも通じていて、毒舌を以て任ずる売り出し中の評論家のようなものであるらしい。しかし、研究者たるものは、自ら研究対象とする作家の〈揚げ足取りをする〉のは〈おかしなものだ〉という物言いからすると、存外初心な文学観・研究観の持主ではなからうか。文学研究は対象作家や作品に対する賛同や絶賛を事とすべきだと、よもや思っていないであろうが……。わざわざ、ここで小谷野の文章を引いたのは他でもない。第二・三章で述べたごとく、佐多の偶像破壊を目論んだものという拙著の書評、佐多や中野についての佐多日記の注記や、中野死後の原に関する直近の言説のあり様に、研究対象に対する不都合な事実追求を避けるかのような空気を感じたからである。当然のことながら、研究対象に対するオマージュに終始し、自足する「文学研究」に明日はない。

最後に、あらためて拙著『佐多稲子研究（戦後篇）』の事実誤認について、読者並びに関係各位に心からお詫び申し上げます。

（二〇一八年一月一〇日脱稿）

# 注

- 1 『くれない——佐多稲子研究——第二二号』（佐多稲子研究会 二〇一八年五月）。以下、『くれない一二号』と略記する。
- 2 『くれない一二号』は〈註〉の用字であるが、拙稿は通例に従って〈注〉を用いる。
- 3 『佐多稲子研究（戦後篇）』（大阪教育図書 二〇一六年三月）
- 4 伊藤佐枝「北川秋雄著『佐多稲子研究（戦後篇）』のこと」（『論潮通信 第一号』論潮の会 二〇一八年七月二〇日）
- 5 伊藤佐枝「論潮ブックレビュー 北川秋雄著『佐多稲子研究（戦後篇）』」（『論潮 第一〇号』論潮の会 二〇一七年七月）
- 6 『佐多稲子研究』（双文社出版 一九九三年一〇月）

7 以下、『戦後篇』と略記する。

8 島本圭太は、「同化と異化のはざままで——佐多稲子『髪のおき』における植民地的主体の形成に」において、「一身に家族の生活を背負った女性作家の表現を、経済的・社会的に異なった立場におかれていた他の作家の表現と併置して、どちらがより時局に迎合・抵抗していたかという単純な比較も厳に慎まなければならない」と、自戒なら未だしも、垂訓口調で述べている。生活の為なら何でも許されるというが如き口舌を弄する島本は、鶴見俊輔や吉本隆明の言う〈職業選択の可能性〉〈物を書いて、食うという職業はたいへん重たい職業〉（思想の科学研究会編『転向研究（下）』平凡社 一九六二年四月 三九〇頁）を、どのように考えているのだろうか。

9 それでは、佐多の偶像化は、それと知ってなされて来たのか、それは何処の、何方のお仕事なのかと、逆に訊ねたい気もする。

10 注1に同じ。六〇頁

11 「佐多稲子『溪流』私注——三つの家と背後の間——」（『姫路獨協大学外国語学部紀要 第25号』二〇一二年三月）

12 注3に同じ。二〇七頁

13 注1に同じ。三一頁

14 注1に同じ。一一七頁

15 注1に同じ。一一八頁

16 注14に同じ。

17 『くれない——佐多稲子研究——第二二号』（佐多稲子研究会 二〇〇八年八月）二四九頁

18 高杉一郎『往きて還りし兵の記憶』（岩波書店 一九九六年二月）一五一、一七〇、一八八頁。このことは『戦後篇』一一四頁の注四で言及している。

19 「新日本文学通信」（『新日本文学』一九五九年三月）

20 注1に同じ。一九七頁

21 松尾尊兌『中野重治訪問記』（岩波書店 一九九九年二月）

22 注21に同じ。一一二頁。一九九一年九月一四日に、松尾が石川県社会教育センターで行った「没後十二年中野重治を偲ぶ記念講演会」の講演原稿で、雑誌初出は「私の見た中野重治」（『ちくま』一九九二年四月号）。

23 竹内美栄子「中野重治を追悼する佐多稲子『夏の葉』の青春」（『草花々通信 一二号』八田千恵子発行 二〇一



# Practical Mistake in My Own Book “The Study on Sata Ineko after World War II”

Akio KITAGAWA

I published “The Study on Sata Ineko after World War II” in March of 2016. I noticed that I had made an important mistake in my book in June of this year. I want this fact made public in this paper.

I shall withdraw my previous remarks L.12~L.13 pp.209 in my book; in addition, I shall apologize to my readers.

- 八年六月）。文末に「二〇一八年四月三〇日記」とある。
- 44 43 42 『中野重治書簡集』（平凡社二〇一二年四月）六二七頁
- 41 40 39 竹内栄美子『中野重治と戦後文化運動——デモクラシーのために』（論創社 二〇一五年一〇月）
- 38 37 36 『入院中の中野重治』（『朝日新聞』一九七九年八月二七日夕刊）
- 35 34 33 『中野重治さんのこと』（『婦人しんぶん 三〇九号』一九七九年一〇月二五日）
- 32 31 30 『半年前のこと』（『群像』一九七九年一月）
- 29 28 27 『病中に聞いた言葉』（『文芸』一九七九年一月）
- 26 25 24 『「驢馬」の頃』（『新日本文学』一九七九年二月）
- 『記録映画「偲ぶ・中野重治」』（『群像』一九八〇年一月）
- 『年々の手応え』（講談社 一九八一年六月）
- 『月の宴』（講談社 一九八五年一〇月）
- 注3に同じ。二九九頁
- 中野重治『愛しき者へ 上』（中央公論社 一九八三年五月）、『愛しき者へ 下』（中央公論社 一九八四年四月）
- 傍線は北川。
- 注35に同じ。四三六、四三八頁
- 『夏の栞——中野重治をおくる（2）』（『新潮』一九八二年二月）
- 澤地久枝『佐多さんの孤独』（『新日本文学』一九九九年五月） 傍線は北川。
- 澤地久枝『佐多稲子生誕一〇〇年記念講演 試される』（『新日本文学』二〇〇四年九・一〇月合併号）。ただし戦時中の疎遠時期には澤地の混同がある。これについては拙著『戦後篇』の三〇九、三一〇頁の注七二を参照のこと。
- 注21に同じ。一九九、二〇〇頁
- 藤森節子『女優原泉 中野重治と共に生きて』（新潮社 一九九四年一月）
- 小谷野敦『現代文学論争』（筑摩書房 二〇一〇年一〇月）一九五頁